

滿洲國醫巫間山の同廟（五鎮の一）の調査である。本廟は創建甚だ古きに拘らず現存の建築は多く清朝の改築に係り僅かに碑中に元代迄溯るものを見ると云ふが、なほ山鎮の詞廟としての規模の大なると行宮の遺構のよく今日に在る例として注目すべき所以はこの所説に甚だ明かである。平面、圖版の寫眞等も固より氏の製作であらう。

支那出土の有双車軸頭に就いて

駒井和愛氏

題名の車軸頭の遺品を挙げ、その用途及び使用せられた時代を説いて之を戰國に於ける所謂銷車の装設たるべきを考定せられたものである。

漢代に於ける連木文とその西方への流傳

江上波夫氏

漢代畫象石中より題名の樹木文を採り、それがかゝる樹形を祥瑞の徴とする事ありしに基くを説き、延いてその類例が西紀四五世紀の埃及及び其他の西方に存することを指摘して之を東方よりの流傳なるべしと想像されたものである。

京都五山建築に現はれたる支那建築手法

飯田須賀斯氏

京都五山即ち天龍、東福、相國、建仁、南禪諸寺の建立當初の状態とその推移とを明らかにして之を大陸の禪刹に比較を試られたものである。唯今日殆んど全く當初の建築を失つてゐる之等諸寺の複原は多くはその配置、平面に止つて構架、裝飾の細に及び得ないが、なほ諸寺の大體と且つ再建等の推移の間の支那風の移入をもよく明らかにされてゐる。

以上のほか原田淑人氏の支那古代簡札の編綴法の所論、中川徳治氏の滿洲漢代遺蹟の主として地理的な研究等があるが、之等は美術考古學にはやゝ遠きものとして紹介を省く。（渡邊）

假綴四六倍 本文八四二頁 圖版コロタイプ其他二三葉 挿圖網版 昭和十一年二月十一日 東方文化學院東京研究所發行 特價五圓

## 佛像彫刻 明珍恒男

佛像修理の事に與つて多年の經驗を積んだ著者が、技術者の立場から佛像彫

刻を説いたものとして、本書は通途の美術史家の著述に比較して甚だ異色を持つてゐる。これは嘗て昭和六年二月より昭和八年八月に至る間雜誌「史迹と美術」に連載された「佛像講話」に若干の補訂を施して一篇としたものであつて、著者の繰返し辯ぜられる如く、技術者の側より説ける初學者への手引草である。此方面の好著に乏しき今日、本書の出現は固より歓迎せらるべきであり、著者の企圖する所も略果し得てゐると思ふが、吾人が特に本書に於て多とすべき點は、その総合的記述たる點よりも寧ろ斷片的に隨所に散見する所謂「佛像を手掛けた者の體驗」であつて、技術者にして初めて言ひ得べきもの、又技術者の口から説かれてこそ權威あるものとなるべき異色ある見解が、本書には豊富に盛られてゐるからである。例へば飛鳥時代の樟材彫刻に關する觀察（本書五一頁）奈良時代末期より平安朝初期にかけての木彫の隆盛に關する見解（本書六一頁）等固よりかくの如きことは専門家の間に於ては既に考へられてゐることであらうが、吾々は斯人の言にして甫めて之に耳を傾ける價值を持つと思ふ。

元來啓蒙的な概説を手極よく纏める爲には、一局部に偏せざる廣き視野と、整然たる學的體系とを素地として之を咀嚼消化した老練の學徒にしてよく成し得るのであつて、吾人は本書がその理想に照らして稍足らざる感あるを訴ふる前に、斯道の専門學徒の手によつてこの方面の努力が拂はれなかつたことを、換言すればその仕事を果すには畑違ひの技術者の手によつて先鞭を着けられたことを憾としたい。著者の本領とせられるゝ所は、又吾々の領を引いて待つ所のものは、本書に於て片鱗を示された所の遺品に關する精細周到なる技術者としての觀察を、素材のまゝで結構であるからもつと豊富に提供せられんことである。（正木）

菊版 本文一二五頁 圖版網目版アート紙刷（口繪共）二四一圖 昭和十一年三月  
スマカケ出版部發行 定價四圓